

連載

# いのち ひろば

(38)

毎月1回、中旬の水曜日に掲載

## 潰瘍性大腸炎 について

小田原市立病院消化器内科担当部長 吉澤 繁

1 病気について  
大腸の粘膜の炎症によって腹痛や頻回の下痢や血便などを生じる病気です。炎症が広がると、症状が重くなる場合があります。20〜30歳です。

2 検査について  
病状の把握には血液検査や便検査(便潜血、便中カルプロテクチン)、大腸鏡検査などを行います。血液検査や便検査で腸管

3 治療について  
炎症の範囲に応じて、直腸炎型、左側大腸炎型、全大腸炎型に分類されます(図1)。病変の範囲や重症度に応じて治療法が異なります。潰瘍性大腸炎では重症度に応じて治療を追加し強化する場合があります(図2)。

4 日常生活の注意点  
食事については寛解期には食事制限は不要ですが、高脂肪食や香辛料の極端な大量摂取は避けたいです。活動期には消化しやすいうどんやおかゆと良質のタンパク質(大豆食品や魚、卵)を摂取しましょう。

5 コロナ環境下での注意すべき点  
炎症性腸疾患でコロナ環境下に注意すべきことは、現在の治療をしっかりと継続しおちついた状態を維持することです。また、腹部症状が悪化した場合は、すぐに主治医に相談し適切な治療を行うことが重要です。

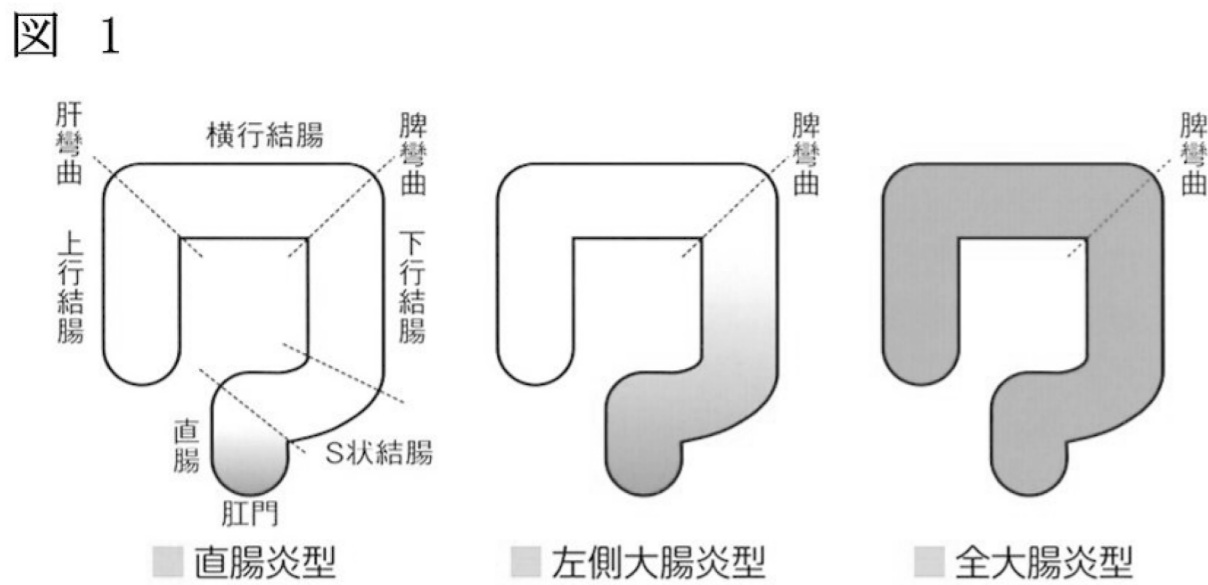


今月のひとこと  
新型コロナウイルス環境下のストレスは潰瘍性大腸炎の悪化の誘因にもなります。現在の生活をしっかりと続けて規則正しい生活を送り、休息や好きなことをする時間をとることが大切です。悩みは他人にも相談し、今を大切に上手にストレスの管理を行うことが大切です。

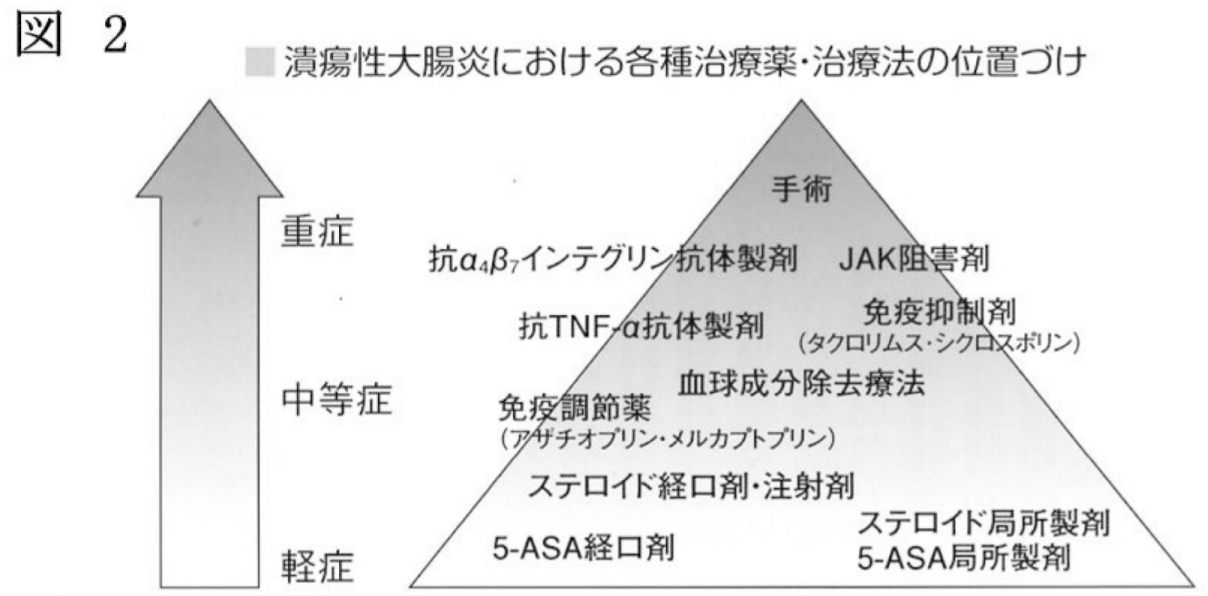
の炎症の状態を確認します。大腸鏡では炎症の範囲や状態を観察します。潰瘍性大腸炎では炎症が広がると血液検査で異常が出る場合があります。長期的に大量のステロイドを使用すると副作用が出現する可能性があります。そのため活動期のみを使用します。

炎症が強い場合にはステロイド剤を使用します。ステロイド剤は経口剤、注射剤、坐剤、注射剤を状況に応じて使いわけます。長期的に大量のステロイドを使用すると副作用が出現する可能性があります。そのため活動期のみを使用します。

炎症性腸疾患でコロナ環境下に注意すべきことは、現在の治療をしっかりと継続しおちついた状態を維持することです。また、腹部症状が悪化した場合は、すぐに主治医に相談し適切な治療を行うことが重要です。



難病性炎症性腸管障害に関する調査研究(鈴木班)冊子 2020年3月より



難病性炎症性腸管障害に関する調査研究(鈴木班)冊子 2020年3月より

妊娠・出産については、潰瘍性大腸炎で不妊率が上昇することはありません。しかし、活動期に妊娠すると妊娠中に潰瘍性大腸炎が悪化する危険があります。寛解期に妊娠することが大切です。また無事に出産するためには、治療をしっかりと継続し、おちついた状態で出産することが重要です。

解熱鎮痛剤(痛み止め)については、短期間服用する際には問題ない場合が多いです。しかし、解熱鎮痛剤で症状が悪化する場合があります。そのため、下痢などの症状が悪化した場合は、早めに主治医に相談しましょう。

小田原市立病院消化器内科担当部長 吉澤 繁

### 新型コロナウイルス対策

皆様の一人一人の行動が  
新型コロナウイルス 拡大予防につながります

手洗い・消毒  
密集を避ける  
マスクの着用  
適度な換気  
オンラインシステムの活用

医療相談・医療機関のご案内  
小田原医師会地域医療連携室  
0465-47-0833

月曜日~土曜日 9:00-12:00 (日曜日、祝日、12/29-1/3 休み)  
13:00-17:00

### 医療機関検索は小田原医師会のサイトから利用できます

発熱、せき、咽頭痛(のどの痛み)があるときは、かかりつけ医へ。  
かかりつけ医がない場合は  
[小田原医師会地域医療連携室 ☎0465-47-0833 :月~土 9:00~12:00, 13:00~17:00]  
もしくは[発熱等診療予約センター ☎0570-048914 :9:00~21:00] に連絡をしてください。  
上記の症状がない方のお問い合わせ先:  
[新型コロナウイルス感染症専用ダイヤル ☎0570-056774]

この時期、新型コロナウイルス感染症に過敏になるあまり「受診控え」をする方が増えています。継続的な治療を中断すると健康上のリスクを高めてしまう可能性があります。自己判断しないで医師に相談しましょう。

医療機関や健診会場では換気や消毒でしっかりと感染予防対策がとられています。安心して受診してください。

小田原医師会の医療機関検索<https://www.odawara.kanagawa.med.or.jp/>

### 小田原医師会より住民の方々へ

①現在、何らかの理由で通院している方は、自己判断で通院(お薬)を中断しないでください。現在治療中の病態が保てなくなることで、病態そのものが悪化し、さらに体調が不安定になることで感染のリスクが高くなり危険が増します。処方を受けとり方はかかりつけ医と相談できますのでお問い合わせください。

②感染症と思われる「体調不良」がみられるとき、特に肺炎など呼吸器症状があるときには、慌てて受診せず、右記の手順でかかりつけ医または近医に問い合わせをしてください。不安な毎日を送られていると思いますが、協力してこの窮状を乗り切りましょう。